ミッションデイ～衣笠病院グループのミッションと私のつとめ～

社会福祉法人日本医療伝道会衣笠病院グループ理事　武藤正樹

衣笠病院グループに古屋理事長のお世話になって入職して以来、足掛け４年になります。この間、皆さんには大変よくしていただいて、老健、外来、訪問診療でさまざまな経験を積ませていただいています。こうした中で、私のミッションが見えてきました。それは二つあります。今日はその二つのミッションをご紹介したいと思います。

一つは総合診療医の養成です。私は横浜の戸塚にある旧国立横浜病院にいたころ厚生省から米国の総合診療医の研修プログラムを学ぶため、1980 年代の後半、ニューヨークの州立大学に留学しました。米国では総合診療医は家庭医と呼ばれています。家庭医の研修は今日本でも初期研修医が行っているスーパーローテイト研修です。

その研修の一環に在宅実習がありました。在宅実習ではブルックリンのユダヤ人の高齢女性のお宅を訪問しました。その女性がバスルームで転倒したので、現場を見に行きました。その時、老年医学の指導医が言った言葉が忘れられません。「このくらいバスルームを見ろ、この電球を明るくするだけで転倒が防げる。電球１個１ドルで、人工股関節の手術代１万ドルの医療費が節約できる」。

このように総合診療医は医療ばかりでなく、患者さんの環境や予防まで配慮しながらなんでも診るというトレーニングを受けました。こうした総合診療医はこれからの超高齢化の日本では欠かせない存在になるでしょう。このため衣笠病院でも総合診療医を養成していきたいと思います。幸い、このたび都甲専務の計らいで南次郎先生を中心に総合診療医の研修受け入れプログラムが作られました。これに期待したいです。

もう一つは地域包括ケア拠点の開発です。ニューヨークから帰国して、1990 年代中ごろに在籍していた新宿の国立医療・病院管理研究所のころは、2000 年から始まる介護保険制度の準備のためにさまざまな政策を研究していました。その中に地域包括ケアの考え方がありました。地域包括ケアは医療介護の連携や地域密着型のサービス提供が主眼です。これからは病院というハコモノよりは、こうした地域包括ケア拠点が地域医療の主流となると思いました。こうした拠点をグループでも持ちたいものです。今、その候補地探しをしています。これからのグループの合言葉は地域密着のコミュニテイ拠点づくりにしたいものです。

以上、衣笠病院グループの二つのミッションをご紹介しました。引き続き皆様方のご協力のほどお願いしたいと思います。